第3章 文系・理系生徒の自己像

この章では、高校生の「自分らしさ」というものが、文系・理系とどのようにかかわるのかを中心に考えてみることにしたい。具体的には、生徒たちの興味や関心が文系・理系という生徒のタイプと結びつくのか。また、そもそも文系・理系について、生徒たちはどのようなイメージを描いているのか。その上で、他の生徒と比較して自分を評価するときに、文系・理系という生徒のタイプは関連するのかを検討したい。

なお、この章でも文系・理系の区別は、文系＝絶対文系＋どちらかといえば文系、理系＝絶対理系＋どちらかといえば理系という生徒自身の自己評価（表1－6）を基本にする。

1．興味や関心のあること

まず、高校生が自分自身をどんなタイプとみているのか、彼らの興味、関心からとらえてみよう。図3－1は、興味、関心に関する11項目に「とてもその通り」「少しその通り」と肯定的に答えたものをまとめたものである。11項目は、あらかじめ文系・理系、その他の分野の関心を想定して構成した。

(1)全体として興味、関心の高いもの

全体として関心が高いのは、「身体を動かすことが好き」65.0%、「人と話したり接触するのが好き」62.5%、「音楽とか絵画といった芸術的なものにひかれる」61.1%、「人間とか人生について考えることが多い」57.7%といった項目で、必ずしも文系・理系にとらわれないような項目が上位を占めた。

これに対して、文系の関心を想定した項目では、「外国語や外国の文化に強い関心がある」38.4%、「社会のしくみや動きに関心がある」36.0%、「文章を読んだり書いたりすることが好き」33.8%で、全体の中の中位から下位である。

また、理系の関心を想定した項目は、「自然界のさまざまな現象や生物に興味がある」51.1%、「物を作ったり、細かいことをこつこつやるのが好き」45.1%が、全体の中位を占めた。これは理系分野に関する関心が一般にいうほど低くないことをうかがわせるものだが、「物の原理や数学のようなものを理論的に追究したりするのが好き」25.0%、「数

字を扱うような細かいことが得意」22.4%が全体の下位にとどまり、理系への関心が分化していることがわかる。

(2)文系・理系生徒の興味、関心の違い

この全体の傾向は、同じ図3－1でもわかるように、文系・理系生徒の間に差をみることができる。

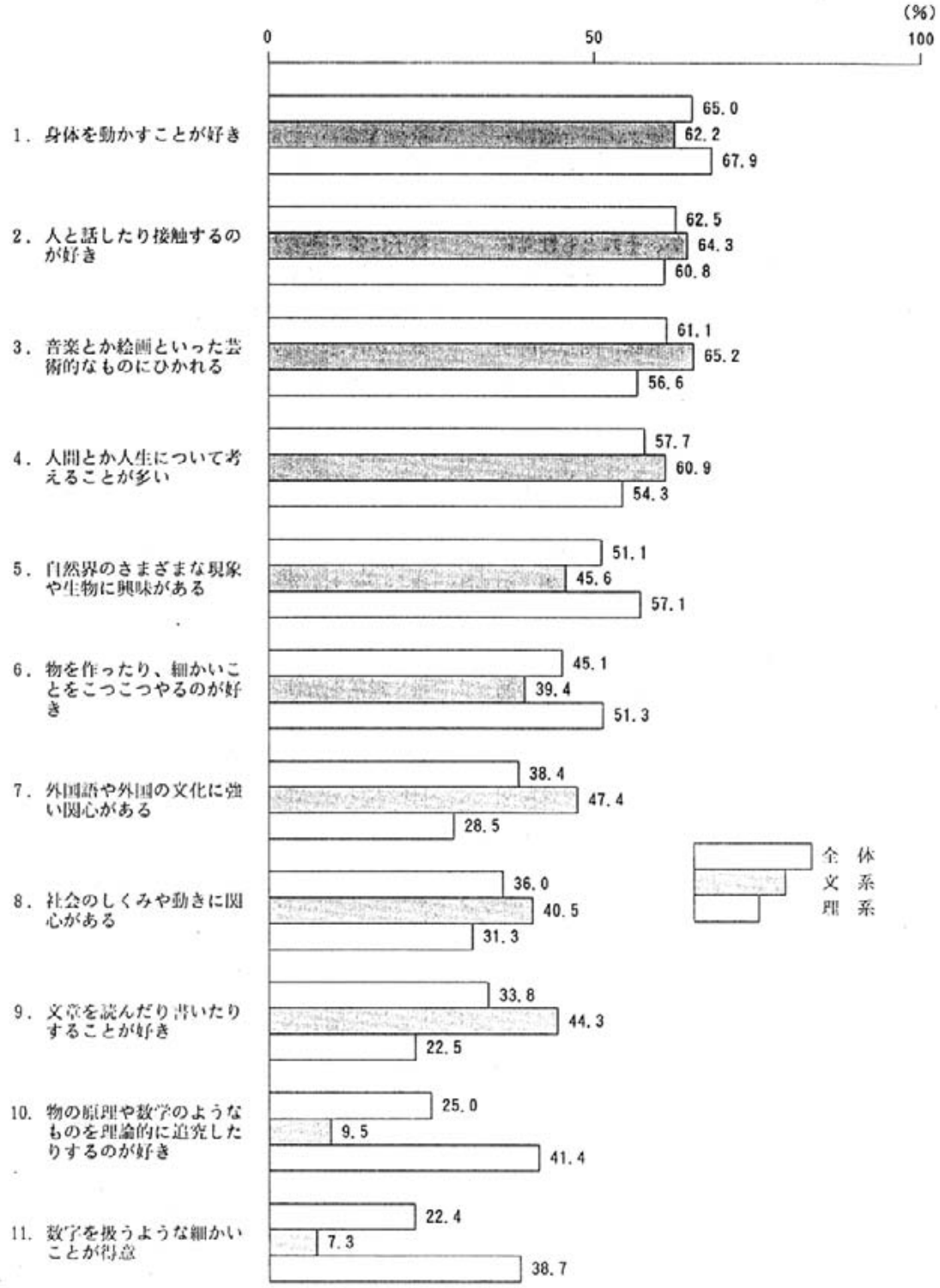
このうち、「物の原理や数学のようなものを理論的に追究したりするのが好き」(文系9.5%＜理系41.4%)、「数字を扱うような細かいことが得意」(文系7.3%＜理系38.7%)のように、「数学的な思考や技能」に関するものに最も関心の開きがみられる。

これに対して、「自然界のさまざまな現象や生物に興味がある」(文系45.6%＜理系57.1%)、「物を作ったり、細かいことをこつこつやるのが好き」(文系39.4%＜理系51.3%)という項目は、確かに理系の関心が高いが、文系生徒も比較的高い関心を寄せていることがわかる。このようにみると、「数学的な思考や技能」が文系と理系を分ける1つの指標となっていることがうかがわれる。

一方、文系に関する項目では、特に「外国語や外国の文化に強い関心がある」(文系47.4%＞理系28.5%)、「文章を読んだり書いたりすることが好き」(文系44.3%＞理系22.5%)の間で関心の開きが大きい。

また、必ずしも文系・理系にとらわれないような項目でも、「身体を動かすことが好き」(文系62.2%＜理系67.9%)が理系に、「人と話したり接触するのが好き」(文系64.3%＞理系60.8%)、「音楽とか絵画といった芸術的なものにひかれる」(文系65.2%＞理系56.6%)、「人間とか人生について考えることが多い」(文系60.9%＞理系54.3%)が文系にというように、文系と理系の関心に多少とも開きがあることがわかる。

図３－１　興味・関心のあること × 文系理系



「とても」＋「少し」その通りの割合

（3）「性差」による興味、関心の違い

以上のことからすると、生徒の興味、関心が、文系・理系という生徒のタイプと関連していることが推察される。しかし、すでに前章まででみてきたように、文系の66.0%が女子、理系の61.7%が男子であることを考えると、生徒の興味、関心が文系・理系という生徒のタイプと関連するのか、それとも性差に基づくものなのかを検討しておく必要があるだろう。

表3－1は、すでにみた興味、関心に関する11項目を「性差」という視点からまとめたものである。これによると、必ずしも文系・理系にとらわれないような項目では、文系・理系という生徒のタイプよりも、性差が関連していることがわかる。

具体的には、「身体を動かすことが好き」というのは、文系・理系というよりも男子の関心が高い項目である（文系男子69.1%、理系男子73.3%：文系女子58.0%、理系女子57.6%）。これに対して「人と話したり接触するのが好き」（文系男子57.1%、理系男子58.6%：文系女子68.7%、理系女子64.6%）、「音楽とか絵画といった芸術的なものにひかれる」（文系男子56.2%、理系男子54.1%：文系女子70.6%、理系女子61.4%）は女子の関心が高い項目といえるだろう。

また、文系と理系の間で関心の差が目立つ項目でも、性差による関心の違いが無視できないものもある。具体的には「外国語や外国の文化に強い関心がある」（文系男子38.6%、理系男子26.3%：文系女子52.7%、理系女子32.6%）、「文章を読んだり書いたりすることが好き」（文系男子37.8%、理系男子20.8%：文系女子48.4%、理系女子25.5%）は文系の特徴であったが、同時に女子、特に文系女子に多くみられる関心でもある。

同様に、理系の特徴とみられる「物の原理や数学のようなものを理論的に追究したりするのが好き」という項目は、文系と理系の違いを大きく分けるものであるが、同時に男子、特に理系男子に多くみられる関心である（文系男子13.9%、理系男子47.1%：文系女子6.9%、理系女子30.8%）。

このようにみてくると、確かに生徒の興味、関心が、文系・理系という生徒のタイプと関連し、それは特に「読書や作文」あるいは「数学的思考や技能」という基本的な部分で顕著にみることができる。言い換えれば、文系・理系を分ける独自の興味、関心の分野といってもいいだろう。また、この傾向は文系女子と理系男子に強くみられるが、同時に項目によっては性差の影響が大きいなど、文系・理系というタイプだけで生徒の興味、関心のすべてを説明できるわけではないことにも留意しておきたい。

表３－１　興味・関心のあること × 文系理系・性

（%）

	性別		男子		女子	
	男子	女子	文系	理系	文系	理系
1．身体を動かすことが好き	71.9	57.8	69.1	73.3	58.0	57.6
2．人と話したり接触するのが好き	58.2	67.0	57.1	58.6	68.7	64.6
3．音楽とか絵画といった芸術的なものにひかれる	55.2	67.4	56.2	54.1	70.6	61.4
4．人間とか人生について考えることが多い	56.4	59.1	61.6	52.9	60.3	57.1
5．自然界のさまざまな現象や生物に興味がある	55.1	46.9	49.6	58.5	43.0	52.3
6．物を作ったり、細かいことをこつこつやるのが好き	46.7	43.4	37.8	52.1	40.3	49.5
7．外国語や外国の文化に強い関心がある	31.2	45.8	38.6	26.3	52.7	32.6
8．社会のしくみや動きに関心がある	39.7	32.2	48.3	34.2	35.8	25.8
9．文章を読んだり書いたりすることが好き	27.3	40.6	37.8	20.8	48.4	25.5
10．物の原理や数学のようなものを理論的に追究したりするのが好き	34.5	15.0	13.9	47.1	6.9	30.8
11．数字を扱うような細かいことが得意	28.2	16.4	8.6	40.3	6.6	35.4

「とても」＋「少し」その通りの割合

2．文系・理系に対するイメージ

(1)文系・理系に対する全体のイメージ

ところで、毎日の学校生活でも文系・理系という言葉はしばしば使われるが、生徒自身は文系・理系というのはどんなタイプの生徒だと思っているのだろうか。

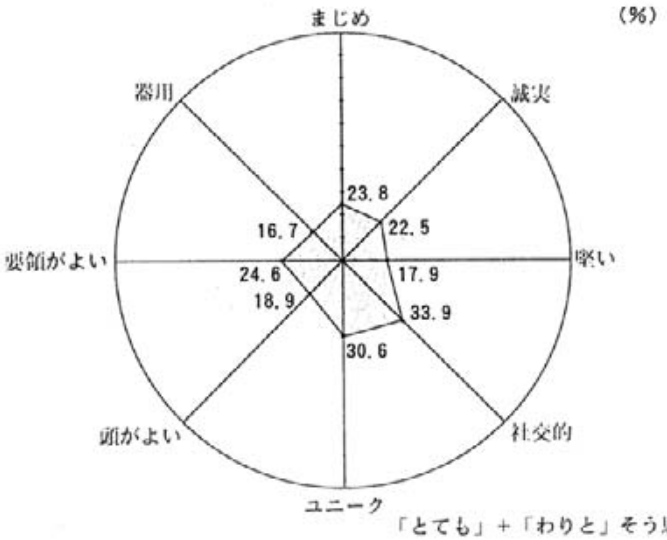
そこで、「文系の人」「理系の人」のイメージを、「とてもそう思う」「わりとそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」という5つの尺度で聞き、回答を得た。図3－2、図3－3は、各項目について「とてもそう思う」「わりとそう思う」という肯定的に答えたものを合計し、全体からみたものである。

両者の図を見比べると、文系のイメージは「社交的」(33.9%) や「ユニーク」(30.6%) を除くと、全体に中心近くで小さくまとまっている。これに対して、理系のそれは比較的大きく広がり、生徒たちは理系のイメージをはっきりとした特徴を持つものとして受けとっていることがわかる。具体的には、「頭がよい」が68.6%と抜き出て高い他に、「器用」48.4%、「要領がよい」45.0%、「まじめ」43.7%、「堅い」39.7%などのイメージを抱く者が多い。

その上で、表3－2では「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」という否定的な評価からこれをとらえてみた。すると、文系に対するイメージは、全ての項目で否定的な答えが肯定的な答えを上回った。具体的には、文系が「堅い」とは思わない者が64.6%、また「器用」「まじめ」「誠実」「頭がよい」とは思わない者がそれぞれ50%台を占めている。文系のイメージは、どうもここでのネガティブな評価の中に結ばれているようである。

これに対して、理系には「社交性」があると思わない者が61.3%、また「誠実」「ユニーク」と思わない者がそれぞれ48.4%と47.8%を占めたが、この3項目を除くと他の項目は肯定的な答えが上回った。

図3－2 「文系の人」に対するイメージ（全体）



「とても」＋「わりと」そう思う割合

図３－３　「理系の人」に対するイメージ（全体）

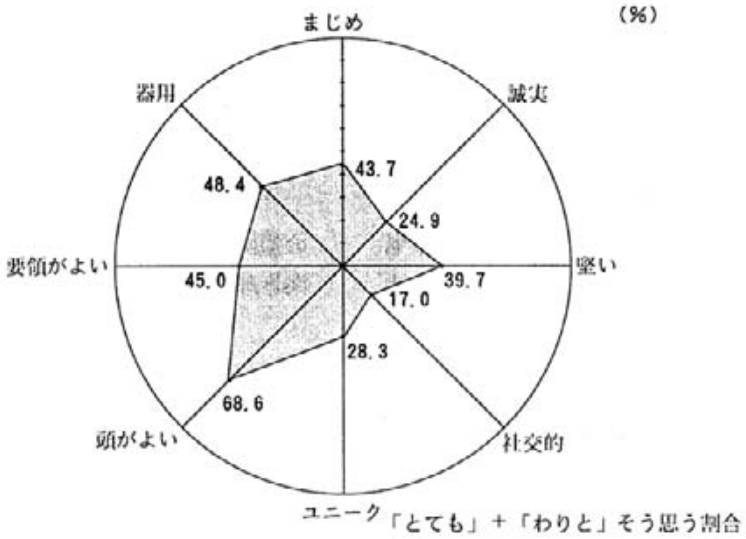


表３－２　「文系の人」「理系の人」のイメージ（全体）

(%)

	「文系の人」			「理系の人」		
	とても＋わりとそう思う		あまり＋ぜんぜんそう思わない	とても＋わりとそう思う		あまり＋せんぜんそう思わない
1．まじめ	23.8	<	54.1	43.7	>	33.2
2．誠実	22.5	<	52.3	24.9	<	48.4
3．堅い	17.9	<	64.6	39.7		39.5
4．社交的	33.9	<	39.3	17.0	<	61.3
5．ユニーク	30.6	<	44.5	28.3	<	47.8
6．頭がよい	18.9	<	51.2	68.6	>	13.7
7．要領がよい	24.6	<	49.4	45.0	>	28.8
8．器用	16.7	<	58.4	48.4	>	27.0

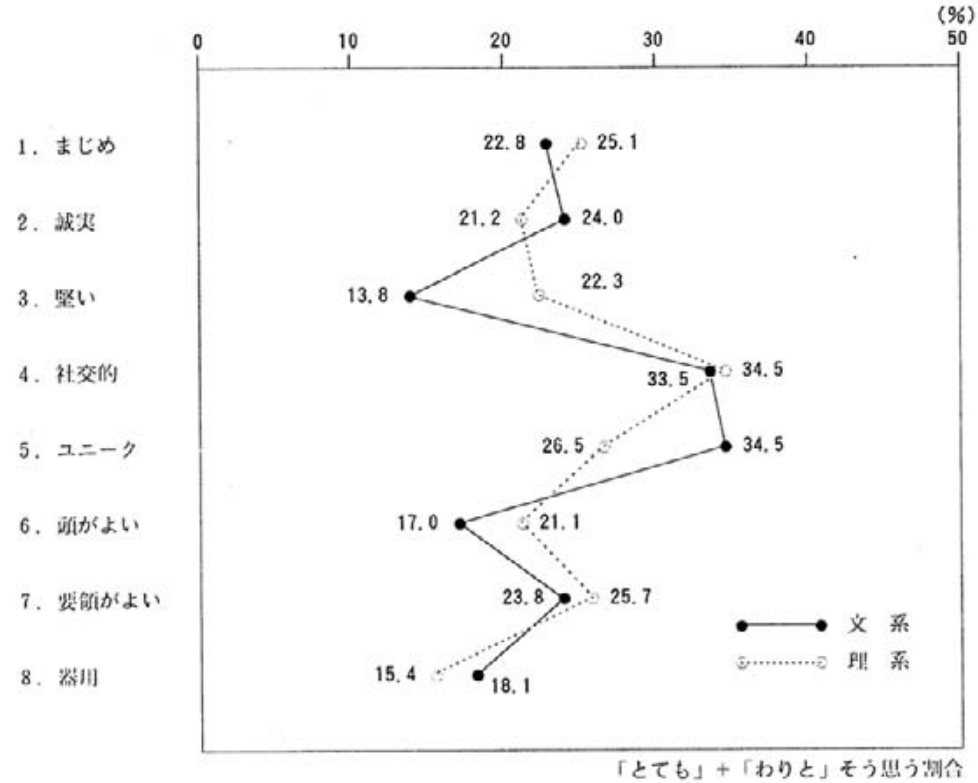
(2)文系・理系生徒のイメージの違い

では文系・理系の生徒たちは、「文系の人・理系の人」のイメージをどのようにみているのだろうか。図3－4、図3－5は、再び「とてもそう思う」「わりとそう思う」と答えたものを、文系・理系の生徒のタイプごとにみたものである。

まず、「文系の人」(図3－4)についてみると、当の文系の生徒は理系の生徒よりも「ユニーク」に文系の特徴をとらえているようである(文系34.5%＞理系26.5%)。これに対して、文系と理系の生徒のイメージに大きな開きがみられるのは「堅い」(文系13.8%＜理系22.3%)で、その他にも「頭がよい」(文系17.0%＜理系21.1%)、「まじめ」(文系22.8%＜理系25.1%)というように、理系生徒には文系を「堅いイメージ」でとらえる者の割合が多い。

「理系の人」(図3－5)についても、この傾向はほぼ同様である。その中で、特に文系と理系の生徒のイメージに開きがみられる

図3－4 「文系の人」に対するイメージ × 文系理系

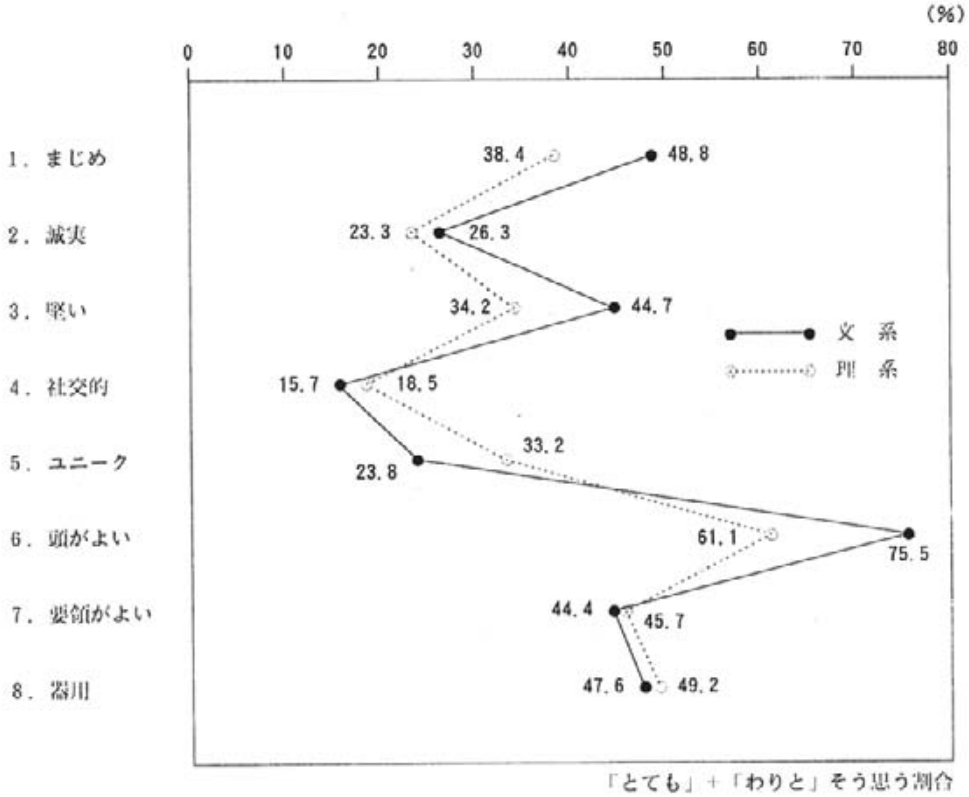


「とても」＋「わりと」そう思う割合

のは、「頭がよい」（文系75.5％＞理系61.1％）で、その他にも「堅い」（文系44.7％＞理系34.2％）、「まじめ」（文系48.8％＞理系38.4％）というように、文系の生徒には理系をより「堅いイメージ」でとらえる者の割合が多い。これに対して、理系の生徒は「ユニーク」（文系23.8％＜理系33.2％）であることに「理系」独自の特徴をとらえているようである。

このように、自らを「ユニーク」、相手を「堅い」という自己と相手の評価のずれは、文系・理系に共通した傾向としてみられる。ただし、文系の生徒には「頭がよい」や「堅い」を自分たちの肯定的なイメージとして評価する者が少ないのに対して、理系の生徒は「頭がよい」や「まじめ」「堅い」ということについて、文系生徒が評価したのと同様に自ら評価する者が多い。こうした理系生徒の「肯定的な自己評価」が、「理系の人」全体のイメージを下支えしているのはいうまでもないだろう。

図３－５　「理系の人」に対するイメージ × 文系理系



(3)「性差」による文系・理系イメージの違い

こうした、文系・理系イメージを、それぞれ男女別でとらえ直したのが表3－3である。これでみると、「文系の人」へのイメージには性差による「多様性」があるようだ。例えば、先にみたような「まじめ」「堅い」「頭がよい」というイメージを抱く者の割合が他と比較して多いのは、理系の中でも男子生徒であることがわかる（それぞれ26.6%、26.0%、23.2%）。逆に「堅い」「頭がよい」というイメージが低いのは女子、特に文系女子の特徴である（「堅い」10.7%、「頭がよい」14.8%）。一方、理系女子が比較的強く抱いているのは「社交的」36.4%というイメージである。「文系」を「社交的」とみる者が多いのは文系男子（37.5%）も同様だが、彼らは文系は「頭がよい」20.5%とも評価し、これは女子よりも多い。

その中で、「ユニーク」だけが、男女とも文系生徒の評価が高いものである（文系男子35.8%、理系男子25.6%、文系女子33.5%、理系女子28.3%）。

これに対して「理系の人」のイメージは、逆に文系の男女、理系の男女でほぼ同様の傾向がみられる。例えば、「まじめ」（文系男子48.5%、理系男子36.1%、文系女子49.0%、理系女子42.8%）や「堅い」（文系男子42.2%、理系男子32.8%、文系女子46.2%、理系女子37.0%）というのは、男女とも文系生徒が「理系」に強く抱くイメージである。また「ユニーク」については、文系男子24.6%、理系男子35.0%、文系女子23.4%、理系女子29.6%というように、これは男女とも理系の生徒に多くみられる傾向である。

その中で、「理系」のイメージを代表する「頭がよい」は、文系男子68.0%、理系男子58.2%、文系女子80.1%、理系女子66.6%というように、文系の中でも女子がとりわけ強く抱くイメージであることがわかる。また、理系の男女がともに高い評価をしていることについては、先にみたような理系生徒の「肯定的な自己評価」や「自負心」の一端をうかがうこともできるのではないだろうか。

表3－3　「文系の人」「理系の人」のイメージ × 文系理系・性

(%)

	「文系の人」				「理系の人」			
	男子		女子		男子		女子	
	文系	理系	文系	理系	文系	理系	文系	理系
1．まじめ	23.1	26.6	22.7	22.2	48.5	36.1	49.0	42.8
2．誠実	23.1	23.3	24.5	17.2	27.6	23.4	25.5	23.0
3．堅い	19.0	26.0	10.7	15.4	42.2	32.8	46.2	37.0
4．社交的	37.5	33.5	30.9	36.4	17.7	19.3	14.5	17.0
5．ユニーク	35.8	25.6	33.5	28.3	24.6	35.0	23.4	29.6
6．頭がよい	20.5	23.2	14.8	17.4	68.0	58.2	80.1	66.6
7．要領がよい	26.5	27.0	22.1	23.0	43.5	45.7	44.9	45.6
8．器用	16.4	12.9	19.1	19.9	49.6	50.5	46.6	46.3

「とても」＋「わりと」そう思う割合

3．文系・理系生徒の自己像

(1)友だちと比べて自分はどういう人間か

さて、こうした「文系」「理系」に対するイメージは、生徒が行った自分自身の評価の中にも読み取ることができるのだろうか。図3－6は、「同じ学年の友だちと比べて自分はどういう人間か」という問いに関する20項目に、「とてもそう」「かなりそう」と答えたものを合計し、上位から並べ直したものである。

まず全体でみると、60%を超えたのは「友だちが多い」の1項目で、友人関係の充実度をあげる者が最も多い。50%台に並んだのは「苦しいこともがまんできる」「心がやさしい」「くよくよしない」、また40%台は「まじめ」「冗談を言ってよく人を笑わせる」「行動力がある」「しっかりしている」である。多少踏み込んだ解釈ではあるが、「物事を実行する具体的な力」と「対人関係についての配慮」という、受験競争や学校生活など日々の現実に対処する彼らの切実な姿をそこにみることもできる。

30%台は8項目にわたるが、「音楽や芸能界の話題にくわしい」「社会の出来事にくわしい」などの社会的関心や情報能力、「努力型」「みんなから信頼されている」という堅実な生き方、「体力なら人に負けない」という身体的能力に関するものが多かった。

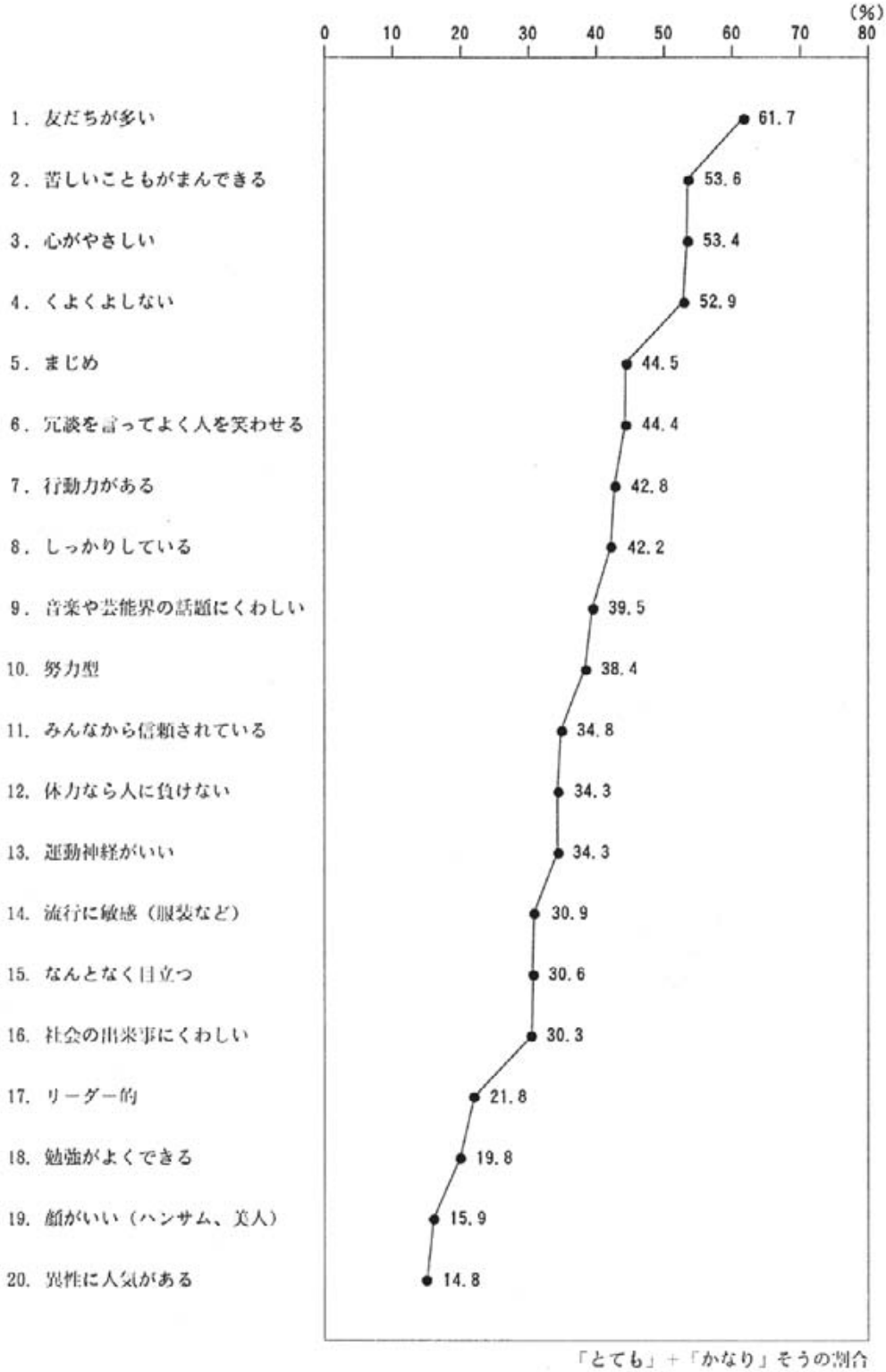
これに対して20%以下だったのは、「勉強がよくできる」「顔がいい」「異性に人気がある」といったもので、場合によっては世俗的で表面的とみなされがちな「他者から評価される自己」については評価の低い傾向がみられた。

これを、文系・理系と性差でみたのが表3－4である。まず、文系・理系でみると、全体の傾向そのものは大きく変わらないが、回答によって順位の異同がみられた。その中で文系に多かったのは、「音楽や芸能界の話題にくわしい」(文系40.6%＞理系38.4%)である。逆に理系に多かったのは、「勉強がよくできる」(文系16.6%＜理系23.2%)、「異性に人気がある」(文系11.9%＜理系17.7%)のように、上では「世俗的・表面的」とした項目である。

ただし、表の性差の部分をみれば明らかなように、「音楽や芸能界の話題にくわしい」というのは、どちらかといえば文系よりも女子にみられる自己評価である(文系男子38.2%、理系男子37.3%、文系女子42.0%、理系女子40.4%)。また、理系に多いとした項目は、実はすべて理系男子にみられる特徴で、理系女子にもその傾向がみられるというものではない(「勉強がよくできる」文系男子17.9%、理系男子26.1%、文系女子15.9%、理系女子17.7%、「異性に人気がある」文系男子16.2%、理系男子20.7%、文系女子9.2%、理系女子12.0%)。

このようにみると、先の「興味・関心」などの場合とは異なって、「自分がどういう人間か」という「自己像」について、男子と女子共通の文系像、理系像を指摘するのは難しいようである。

図３－６　自己像（全体）



「とても」＋「かなり」そうの割合

表３－４　自己像 × 文系理系・性

（%）

	全体		男子		女子	
	文系	理系	文系	理系	文系	理系
1．友だちが多い	62.0	61.4	56.3	61.4	65.6	61.4
2．苦しいこともがまんできる	52.4	55.0	51.3	53.8	53.1	57.1
3．心がやさしい	51.6	55.1	57.5	58.2	48.2	49.5
4．くよくよしない	51.3	54.4	50.8	55.8	51.6	51.9
5．まじめ	45.4	43.5	42.3	43.5	47.2	43.3
6．冗談を言ってよく人を笑わせる	44.4	44.4	39.4	42.1	47.5	48.9
7．行動力がある	41.3	44.4	40.5	43.9	41.8	45.3
8．しっかりしている	42.8	41.3	40.9	41.5	44.1	41.1
9．音楽や芸能界の話題にくわしい	40.6	38.4	38.2	37.3	42.0	40.4
10．努力型	38.9	37.8	36.0	37.5	40.6	38.2
11．みんなから信頼されている	34.3	35.0	28.1	35.4	38.1	34.4
12．体力なら人に負けない	33.6	35.0	38.6	37.5	30.6	30.3
13．運動神経がいい	30.8	37.9	38.1	42.3	26.2	29.4
14．流行に敏感（服装など）	31.2	30.5	30.7	29.3	31.6	32.7
15．なんとなく目立つ	28.2	33.0	30.7	34.8	26.7	29.7
16．社会の出来事にくわしい	31.0	29.4	37.8	32.5	26.8	23.3
17．リーダー的	21.2	22.6	22.8	22.8	20.2	22.0
18．勉強がよくできる	16.6	23.2	17.9	26.1	15.9	17.7
19．顔がいい（ハンサム、美人）	13.7	18.3	17.6	22.1	11.5	10.7
20．異性に人気がある	11.9	17.7	16.2	20.7	9.2	12.0

「とても」＋「かなり」そうの割合

(2)文系・理系の自己像

では、文系・理系の男女に、それぞれの特徴をみることはできるだろうか。表3－4をもう一度見直すと、「友だちが多い」「苦しいこともがまんできる」「くよくよしない」の3項目は共に50%を超え、自己評価が共通して高いことがわかる。さらに男子には、これに「心がやさしい」が加わる。

その上で、他との比較で最もはっきりとした特徴がみられるのが「理系男子」である。すでにみた、「勉強がよくできる」「異性に人気がある」の他にも、「運動神経がいい」「顔がいい」「なんとなく目立つ」など、他では自己評価の低い項目も含めて「他者から評価される自己」に積極的で肯定的な評価が目立つ（「顔がいい」文系男子17.6%、理系男子22.1%、文系女子11.5%、理系女子10.7%）。前節でも、「頭がよい」など理系生徒の「理系イメージ」は肯定的なものが多かったが、自己評価としてもそれが反映しているようである。

これに対して「文系男子」でも、「勉強がよくできる」「異性に人気がある」などにやや理系男子と近いものがみられるが、全体では「体力なら人に負けない」38.6%、「社会の出来事にくわしい」37.8%などを選ぶ者の割合が多い。それに対して他と比較して低かったのが「みんなから信頼されている」（文系男子28.1%、理系男子35.4%、文系女子38.1%、理系女子34.4%）であった。

「理系女子」では、自己評価として「苦しいこともがまんできる」57.1%、「冗談を言ってよく人を笑わせる」48.9%、「行動力がある」45.3%などを他に比較して多くが選択している。一方、「社会の出来事にくわしい」という者は23.3%と他に比べて一番低い。

「文系女子」では、他と比べて一番低かった「勉強がよくできる」15.9%の他は、「冗談を言ってよく人を笑わせる」47.5%、「まじめ」47.2%、「しっかりしている」44.1%、「音楽や芸能界の話題にくわしい」42.0%、「努力型」40.6%、「みんなから信頼されている」38.1%などを選択する者が比較的多かった。

ここでは、こうしたさまざまな特徴から文

系・理系の男女の中に、さらにどのようなタイプがあるのかについての分析までは進めていない。また調査対象校に比較的進学校が多かったことも考慮に入れる必要があるだろうが、他章でもみられる理系生徒の将来への志向や達成意欲の高さが、数字に表れた理系男子生徒の「生き生きした姿」からうかがうことができる。

こうした生徒の姿に関連して、最後に表3－5をみておきたい。これは、もし生まれ変わることができるなら、男性、女性のどちらに生まれ変わりたいかを聞いたものである。全体でみると、男子の83.0%が男性に生まれたいと思っているのに対して、女子では41.0%が女性にではなく男性になりたいと考えている。特に理系の女子は45.8%、約半数が男性になりたいと考えているのである。

女子、特に理系女子の自己実現にとって女性であることが足かせになっているのかどうかをここで明らかにすることはできないが、男性は理系、女性は文系という考え方が、未だに社会や家庭、学校でも強いと指摘される中で、改めて考えねばならない課題といえるだろう。

表3－5 「生まれ変わるとしたら男性か、女性か」× 文系理系・性

(%)

	性別		男子		女子	
	男子	女子	文系	理系	文系	理系
絶対＋できれば男性	83.0	41.0	82.9	83.2	38.5	45.8
絶対＋できれば女性	17.0	59.0	17.1	16.8	61.5	54.2

第4章 高校生の文系・理系の分化と進路選択の要因

昨秋、受け持ちの高校2年生と、3年次の選択科目や将来の進路について個人面接を行い、進路の切実な悩みの相談を受けた。

自分の性向が文系か理系か、自分の希望する分野や大学と親の期待が一致しない、将来は医者になりたいが、受験科目に不得意科目がある、環境やエネルギーの研究には、どのような学部・学科が適しているのか等、個人レベルの悩みから学部・学科の内容の差異や制度レベルの問題まで、急激に変化する社会状況を反映して実に多様な内容であった。

多くの生徒は高2の秋までは、自分の将来の進路をまだ漠然と考えていたふしがあったが、いざ科目選択の決定という手続きの段になって、いよいよ自らの進路の決断を迫られたわけである。3年次の選択科目の決定ということは、大学・短大の入試科目との関連から志望大学・学部などをしぼっていくことを意味している。高校2年生にしてみれば、自己の将来を託す分岐点に立たされたようでもあり、実に重い決断のようであった。

高校教育の現場で文系・理系というカテゴリーが重視されるのは、学校組織の上では、教育課程（カリキュラム）の編成に関してである。教科・科目の設置、単位・時間数の配当、選択講座（クラス）数の配置などが関係する。一方、教育指導の面では、理系・文系を指標として、授業科目の好き嫌いや得意・不得意といった本人の能力や適性を把握し、進路選択の大きな目安とさせることができる。

今日高校でいわれるところの文系・理系のカテゴリー化は、おそらく大学入試制度の科目構成に由来してくるのではなかろうか。日本の大学は伝統的に学問の系によって、学部・学科が縦割りにされてきた。したがって、高校の進路指導、とりわけ受験生にとっての学部・学科の選定や志望校選びにおける文系・理系カテゴリーの果たす機能は、そうした学問の系に自己の将来や専門性を自己同定させるところにある。確かに、高校生にとっては、こうしたカテゴリー化の持つ意味は決定的に重いものであろう。

さて、これまでみてきたように、高校生の段階での文系タイプと理系タイプの差異は、学校生活や自己像の描きかたにも、その特性がかなり明確に現れていた。そこで、そうした文系・理系カテゴリーが高校生の進路選択にどのような影響を与え、進路選択を規定してきているのかを本章では探ってみたい。

1．大学・学部選択の動向

まず、実態的な側面から、調査対象生徒の大学進学希望学部と文系タイプ・理系タイプの関係を、**表4－1**に示した。

全体的には、①工学部、②教育学部、③経済、経営、商学部、④人文科学に集中する傾向がみられるが、これをさらに文系・理系の男女別でみていくと、文系男子は経済・経営・商学部、法学、人文科学の順に、また女子は人文科学、外国語に希望が多い。理系男子は工学部に極度に集中化の傾向がみられ(53.8%)、一方女子は保健看護、薬学といった資格取得が可能な学部に人気があるようである。なお教育学部は、学部内容としては文系、理系双方の性格を持っていると思われるが、希望選択の動向からみると、文系女子(22.1%)、文系男子(16.0%)に人気が傾いている。とりわけ、理系男子の教育学部選択者は少ない。

次に、高校卒業後の進路希望について、大学の入学難易度を3段階に区切ってまとめたものが、**表4－2**である。超難関大学は日本の大学入試偏差値のトップレベルを示す大学である。この超難関大学を目指している者は文系ではどちらかというと女子の方が多く(男子18.3%＜女子20.2%)、理系では男子の方がまさっている（男子23.3%＞女子18.5%)。難関大学レベルでは、理系女子が多く、また文系男子は普通程度の大学に多く集まっていることがわかる。

つまり、理系タイプの生徒は文系に比較して、志望する大学のレベルが高く、特に理系男子は文系男子と比べるとその傾向が高い。

一方、文系タイプの男子は、あまり高望みをせずに実力相応程度の無理のない進路選択を考えているようである。

表4－1　大学進学希望学部 × 文系理系・性

(%)，(　) は実数

	全体	文系		理系	
		男子	女子	男子	女子
人文科学	8.1 (192)	13.6 (62)	14.7 (112)	1.1 (8)	2.5 (10)
社会科学	2.4 (56)	3.3 (15)	4.6 (35)	0.5 (4)	0.5 (2)
外国語	5.7 (133)	4.6 (21)	13.1 (100)	0.9 (7)	1.3 (5)
国際	2.5 (60)	2.4 (11)	5.6 (43)	0.4 (3)	0.8 (3)
法	5.2 (123)	15.1 (69)	4.7 (36)	1.5 (11)	1.8 (7)
経済・経営・商	8.8 (208)	25.3 (116)	7.3 (56)	3.4 (25)	2.8 (11)
政治	0.2 (5)	0.7 (3)	0.1 (1)	0.1 (1)	－
福祉	1.4 (32)	1.3 (6)	2.6 (20)	0.3 (2)	1.0 (4)
芸術	1.5 (36)	0.7 (3)	3.5 (27)	0.3 (2)	1.0 (4)
理学	5.7 (133)	1.5 (7)	0.7 (5)	11.9 (89)	8.1 (32)
工学	20.4 (481)	7.9 (36)	0.9 (7)	53.8 (402)	9.2 (36)
医学	6.4 (151)	2.8 (13)	2.4 (18)	10.2 (76)	11.2 (44)
歯学	0.6 (14)	－	0.3 (2)	0.8 (6)	1.5 (6)
薬学	3.9 (92)	0.2 (1)	2.1 (16)	3.5 (26)	12.5 (49)
保健看護	3.7 (88)	0.2 (1)	4.3 (33)	0.3 (2)	13.3 (52)
農・水産	3.7 (86)	0.9 (4)	2.4 (18)	4.8 (36)	7.1 (28)
獣医	1.4 (33)	0.4 (2)	0.4 (3)	0.8 (6)	5.6 (22)
教育	13.6 (321)	16.0 (73)	22.1 (168)	4.2 (31)	12.5 (49)
生活科学	1.2 (29)	－	2.8 (21)	－	2.0 (8)
その他	3.6 (85)	3.1 (14)	5.4 (41)	1.2 (9)	5.3 (21)
合計	100.0 (2,358)	100.0 (457)	100.0 (762)	100.0 (746)	100.0 (393)

◯は10%を超える有意な数値

表４－２　高校卒業後の進路 × 文系理系・性

（%）

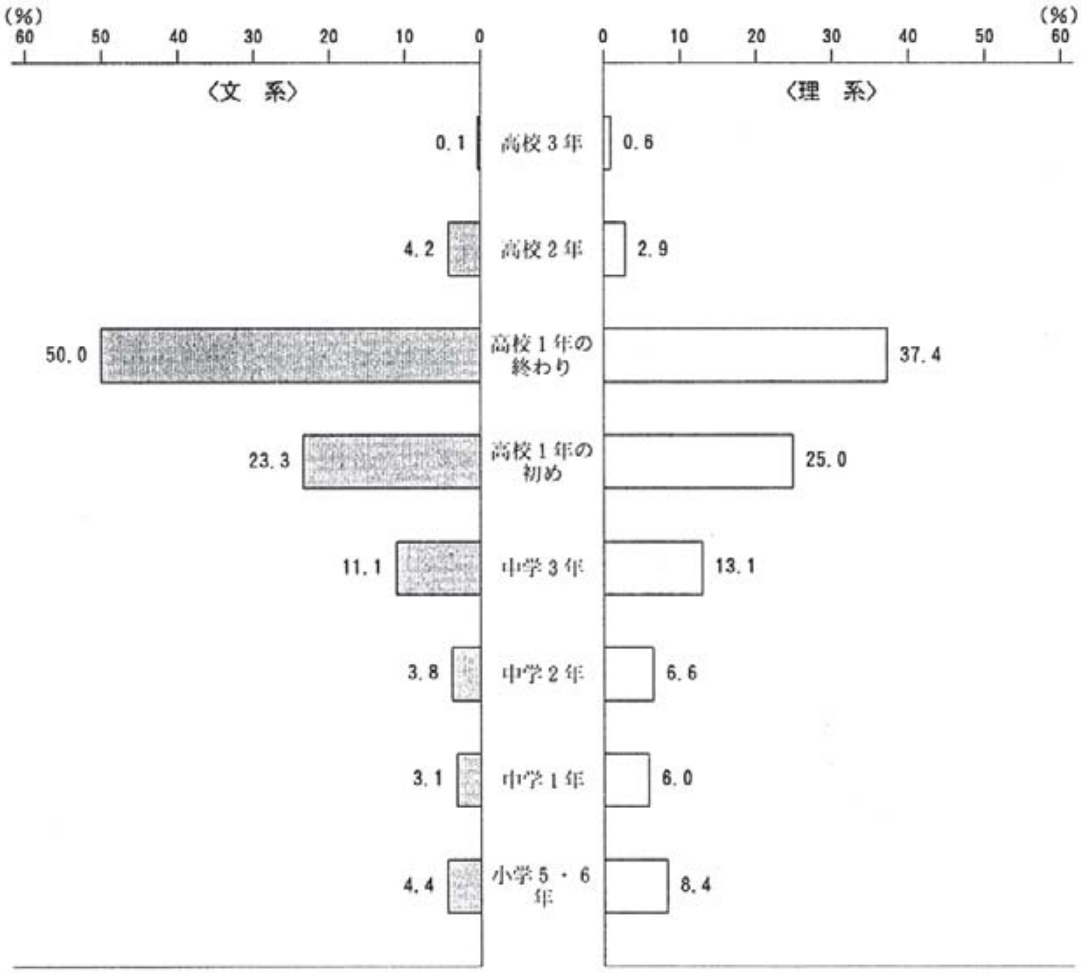
	全体	文系			理系		
		男子		女子	男子		女子
超難関大学	20.4	18.3	<	20.2	(23.3)	>	18.5
難関大学	39.7	36.0	<	40.0	39.9	<	(43.0)
普通程度の大学	32.2	(41.1)	>	32.0	35.0	>	28.6
その他	7.7	4.6		7.8	1.8		9.9

（　）は最大値（以下同）

2．文系・理系の進路決定時期

それでは、一般に文系か理系かの進路をいつの時点で決定しているのであろうか。図4－1は、文系と理系の進路決定時期をグラフで示したものである。小学校段階ですでに進路を固めたものは、文系4.4%＜理系8.4%と理系の方が倍近く多い。中学校終了段階では、文系22.4%＜理系34.1%となって、理系タイプはほぼすでに3分の1が進路を分化させて

図4－1　文系・理系の進路決定時期



いる。高校1年終了時が文系・理系ともに最も多くなっているのは、一般に、この時期に新2年に向けて社会や理科の選択科目の決定がなされるためであろう。

表4－3は、そうした進路の決定におけるこれまでの変化に関して尋ねた結果であるが、一貫して変わらないのは理系男子が最も多く、90.5%に達している。理系から文系に乗り換える、いわゆる文転者は文系タイプに多く、特に男子が際立っている。

このようにみてくると、理系タイプの生徒は、学校教育の比較的早期に進路を分化させ、その後も一貫した進路をとっていることが知れる。一方、文系タイプは、総じて進路決定時期が後になっており、理系タイプと比べると時間的な幅がある分、それだけ多様なものの見方を身につけることも可能であろう。

表4－3　進路決定の変化 × 文系理系・性

(%)

	全体	文系			理系		
		男子		女子	男子		女子
ずっと同じ	83.5	75.7	<	81.7	(90.5)	>	82.9
理系→文系（文転）	11.4	(20.9)	>	14.4	4.8		7.0
文系→理系（理転）	5.1	3.4		3.9	4.7		10.1

3．進路選択に影響を与えた要因

ところで、初めにも紹介したように、進路決定という高校生にとって極めて重大な選択は、どのようなものを判断の基準や参考にしてなされているのであろうか。進路選択の影響要因として、表４－４に掲げる16の項目を用意し、影響度の強さを５段階で答えてもらった。表は、「とても影響した」と「わりと影響した」を合わせた割合を示している。

まず、影響度の強い項目の全体的な傾向をみていくと、１.自分の趣味・興味（64.3%）、２.数学の成績（56.7%）、以下６.社会の成績までは各教科の成績が影響を与えている。つづいて、７.進路情報誌の情報（22.3%）、８.高校の先生（19.6%）、９.親の意向(16.7%）などがあげられるが、成績要因と比べれば影響度はそれほど強くない。先輩や友だちのアドバイス、そして部活動やボランティア活動などの経験はさらに弱くなっている。

次に、影響度に性差の開きが出て比較的強く影響しているのは、男子では数学、理科の成績であり、女子では自分の趣味・興味、英語の成績、進路情報誌の情報、親の意向、小・中学校時代の先生などの項目のようである。

今、このような項目をその内容の要素に着目して、以下の通りに６つの要因群に類型化して整理しておく。適性にかかわる要因［項目１］、以下同様に能力［２，３，４，５，６］、マスメディア［７，11］、パーソナルメディア［８，10，13，14］、家庭的背景［９，12］、直接体験［15，16］。このような影響要因の観点からもう一度進路選択の影響度をみてみると、全体には、適性要因と成績要因の２つが大きなウエイトを占めていることがわかる。その一方において、直接体験要因がほとんど影響力を持っていないようであり、進路形成における学校教育のこうした側面の弱さが露呈されているのかもしれない。そして性差の側面では、男子には成績要因が、また女子には適性要因、マス・パーソナルなメディア要因が強く働いていることがわかる。

表４－４　性別の進路選択要因

（%）

	全体	性別	
		男子	女子
1．自分の趣味・興味	64.3	58.7	70.1
2．数学の成績	56.7	58.6	54.6
3．理科の成績	42.1	47.8	36.3
4．英語の成績	41.9	40.4	43.5
5．国語の成績	37.4	38.2	36.6
6．社会の成績	23.2	23.6	22.7
7．進路情報誌の情報	22.3	17.7	27.1
8．高校の先生	19.6	21.0	18.1
9．親の意向	16.7	14.0	19.4
10．小・中学校時代の先生	12.1	10.3	14.0
11．マスコミからの情報	10.2	9.2	11.1
12．親の職業	8.2	9.2	7.3
13．先輩のアドバイス	8.0	7.1	8.8
14．友だちのアドバイス	7.5	6.0	9.0
15．部活動での経験	7.2	6.0	8.4
16．ボランティア活動での経験	4.3	3.3	5.3

「とても」＋「わりと」影響した割合

そこでさらに、この影響要因について、文系・理系の程度の違いによる現れ方をみたものが表４－５である。一見して明らかなことは、文系・理系ともにその程度が強まるほど各要因の影響も強くなり、相関的なようである。文系タイプでは、適性要因、英国社の成績要因、進路情報誌の情報や小・中学校時代の先生などのマス・パーソナルメディア要因が顕著であり、理系タイプでは、数学・理科の成績要因が絶対的に強く影響している。また、理系には、親の意向や職業などの家庭的背景要因も無視できない影響が現れている。文系には女子が多く、理系には男子が多いというサンプル特性からすれば、おそらく性差の要因がこの結果にオーバーラップされてきたとみるのが自然であろう。しかし、いずれにせよ、文系・理系カテゴリーにおける各要因の強さは支持されよう。

こうした進路選択に与える要因の影響は、むろん日々の学校生活の中で不断にかかわりを持ってくることはいうまでもない。本来、高校生活のさまざまな局面が最終的に自己の適確なる進路選択に生かされることは、学校教育の狙いとするところでもある。そこで、学校生活に対する充足感との関係を表４－６に示した。学校生活の充足感に関する調査対象生徒の全体的な現れ方は、すでに表１－４でみているが、それをもとに「とても充足している」と「かなり充足している」、「あまり充足していない」と「ぜんぜん充足していない」をそれぞれまとめて、「とても充足している」、「ぜんぜん充足していない」というカテゴリー化をはかってある。それによれば半数以上の54.6%の生徒が充足感を持っており、そのうち、とても充足感を持つ者は全体の約２割であった。

さて、表４－６をみると、学校生活の充足度と一貫して相関がみられるのは、自分の趣味・興味の適性要因（とても充足している72.2%＞やや充足している65.9%＞やや充足していない63.2%＞ぜんぜん充足していない57.5%）、高校の先生（以下同様、26.7%＞19.7%＞18.7%＞14.8%）、小・中学校時代の先生（16.2%＞11.9%＞10.6%＞10.3%）、友だちのアドバイス（10.1%＞7.7%＞6.6%＞5.8%）などのパーソナルメディア要因であった。つまり、このことは学校生活の中でこれまでに自分の趣味や興味を生かすことができたり、先生との関係もうまくいき、友だちにも恵まれてきた者にとっては、自己の進路選択にかかわるこのような要因の持つ影響度は極めて大きなものであるということがいえよう。

数学や理科といった理系科目の成績は、学校生活の充足度と一貫性はみられないが、英語の成績はかなり相関しているようである。また、進路情報誌の情報の影響力も学校生活の充足層には大きい。

表４－５　文系理系別の進路選択要因

（%）

	文系理系別タイプ			
	絶対文系	どちらかといえば文系	どちらかといえば理系	絶対理系
1．自分の趣味・興味	71.8	59.4	60.1	69.9
2．数学の成績	59.6	49.6	53.4	69.8
3．理科の成績	38.2	32.2	43.3	61.2
4．英語の成績	51.1	39.0	38.5	41.4
5．国語の成績	50.2	33.7	25.7	47.0
6．社会の成績	35.8	25.0	15.7	17.3
7．進路情報誌の情報	24.4	22.9	22.8	18.0
8．高校の先生	20.2	19.7	19.5	18.9
9．親の意向	16.2	16.5	19.4	12.9
10．小・中学校時代の先生	16.8	10.8	9.5	12.7
11．マスコミからの情報	10.1	10.2	10.0	10.6
12．親の職業	7.1	7.5	8.3	10.4
13．先輩のアドバイス	8.6	7.6	9.2	5.7
14．友だちのアドバイス	8.8	8.2	6.6	6.1
15．部活動での経験	10.0	7.1	5.5	7.1
16．ボランティア活動での経験	5.5	4.1	3.8	3.8

「とても」＋「わりと」影響した割合

表４－６　進路選択要因 × 学校生活の充足感

(%)

	学校生活の充足感						
	とても充足している		やや充足している		やや充足していない		ぜんぜん充足していない
1．自分の趣味・興味	72.2	>	65.9	>	63.2	>	57.5
2．数学の成績	52.9		59.1		55.8		57.0
3．理科の成績	42.3		43.4		39.9		42.0
4．英語の成績	44.1	>	42.8		43.0	>	38.6
5．国語の成績	38.9		36.1		37.0		38.2
6．社会の成績	24.2		22.3		25.8		21.6
7．進路情報誌の情報	28.5	>	21.7		22.4	>	18.9
8．高校の先生	26.7	>	19.7	>	18.7	>	14.8
9．親の意向	18.8		16.4		15.0		16.5
10．小・中学校時代の先生	16.2	>	11.9	>	10.6	>	10.3
11．マスコミからの情報	11.2		10.5		9.3		9.7
12．親の職業	10.9		6.3		7.9		9.1
13．先輩のアドバイス	10.3		7.3		7.7		7.4
14．友だちのアドバイス	10.1	>	7.7	>	6.6	>	5.8
15．部活動での経験	10.9		7.6		5.2		5.4
16．ボランティア活動での経験	6.0		4.3		3.2		3.7

「とても」＋「わりと」影響した割合

4．卒業後の進学希望大学・学部と進路選択要因の関連

最後に、このような進路選択の要因が具体的な大学選びや学部選択行動にどのような影響を与えているのかをみておきたい。表4－7は、卒業後の進路としてどのレベルの大学を目標にしているのか、それに及ぼす進路選択要因の影響度をみたものである。まず意外に感じたのは、成績要因の影響が超難関大学にではなくて、その下の難関大学レベルを目指す受験生に強く現れているという点であった。やはり成績中位層ほど、成績に左右され

表4－7　進路選択要因 × 卒業後の進路

(%)

	卒業後の進路			
	超難関大学	難関大学	普通程度の大学	その他
1．自分の趣味・興味	67.7	68.5	57.7	66.6
2．数学の成績	52.4	(60.6)	56.5	45.0
3．理科の成績	40.9	(45.3)	40.9	30.4
4．英語の成績	42.7	(45.2)	38.7	35.7
5．国語の成績	35.2	(40.9)	35.9	27.7
6．社会の成績	23.6	24.7	22.2	16.2
7．進路情報誌の情報	18.3	24.8	21.9	(32.4)
8．高校の先生	16.5	20.9	20.1	17.0
9．親の意向	(19.5) >	17.5 >	14.3	16.9
10．小・中学校時代の先生	10.0	12.0	13.1	12.6
11．マスコミからの情報	10.5	9.8	9.6	(16.1)
12．親の職業	9.4 >	8.9 >	6.8	8.1
13．先輩のアドバイス	7.5	7.8	8.0	8.1
14．友だちのアドバイス	7.1	6.9	7.9	(11.7)
15．部活動での経験	7.1	6.8	7.6	7.2
16．ボランティア活動での経験	4.0	4.1	4.1	(9.0)

「とても」＋「わりと」影響した割合

やすく、進学希望大学のレベルを選択する場合にも、自ずとそれが現れてくるのであろう。

一方、入学難易度のレベルに相関して強く現れるのが、親の意向や親の職業といった家庭的背景の要因である。超難関大学希望者ほど、親の期待や影響をそれだけ強く受けてきているわけであり、さらにいうならば、これまでの分析結果によれば、これは理系タイプの男子層ということになる。

表4－8は、進路選択の要因のうち主だった要因として、適性・成績（数・英）・マスメディア（進路情報誌）・パーソナルメディア（高校の先生）をとりあげて、そうした要因が具体的な学部選択行動にどの程度の影響を与えているのかをみようとしたものである。学部選択と要因の結びつきが比較的強く現れたのは、文系学部では人文科学系学部で進路情報誌の情報が、また外国語系学部や経済・経営・商学部などで英語の成績が影響を与えている。一方、理系学部では、工学部の選択に数学の成績が大きく関与し、また趣味・興味といった適性要因もかなりの程度で影響しているようである。保健看護系に進路情報誌が強い影響を与えているのは、来たる高齢化社会に向けてマスメディアの情報が豊富に提供され、このような分野への理解が職業的にも将来性のあるものとして徐々に浸透してきている現れではないだろうか。

このようにみてくると、学校生活の中で毎日一番身近にいると思われる高校の先生が、個人的な気持ちは仮にあるにせよ、生徒の進路選択にあまり深くかかわっていないことに気づかされる。唯一は、教育学部系統を選択する生徒に影響を与えられるだけのようである。文系タイプ、理系タイプのそれぞれの個性に学校教育の中で真剣にぶつかり合うことは、ある意味で専門性に限定された個別教師の職能の範囲を超えるものが要求されてくることも多い。進路指導への取り組みを学校組織として要請される所以も、この辺にあろう。

表４－８　大学の学部選択 × 進路選択要因

（%）

	進路選択要因				
	趣味・興味	数学の成績	英語の成績	進路情報誌	高校の先生
人文科学	18.7	15.9	16.5	23.3	18.4
社会科学	5.0	4.0	4.3	5.1	3.5
外国語	14.3	10.7	19.3	12.6	11.9
国際	4.9	5.7	6.8	5.6	2.6
法	8.6	10.5	9.5	8.6	9.3
経済・経営・商	11.6	18.0	20.3	17.7	18.8
政治	0.3	0.3	－	－	－
福祉	3.1	2.5	3.4	6.9	4.2
芸術	4.1	2.3	2.9	4.3	4.5
理学	11.6	12.8	10.2	7.8	12.8
工学	41.8	45.6	37.3	30.5	34.8
医学	11.3	12.5	12.6	11.0	9.1
歯学	1.1	0.5	0.3	0.9	0.3
薬学	8.5	8.3	6.4	8.4	5.8
保健看護	7.0	7.0	7.9	12.5	6.4
農・水産	6.9	6.2	7.2	8.5	7.5
獣医	3.0	2.2	2.0	1.9	1.3
教育	26.9	26.8	25.1	20.7	39.1
生活科学	3.4	2.7	2.9	4.9	4.1
その他	7.1	5.4	5.2	8.3	5.4

「とても」＋「わりと」影響した割合

まとめ

近年、「理系離れ」という言葉が受験界のみならず、国策レベルでも話題になっている。これはおそらく、来たる21世紀を眺望したとき、科学技術立国を標榜するわが国としては、日進月歩している最先端科学技術を支えられる基盤を今から確固としておかねばならないが、そうした情勢にあるにもかかわらず、青少年が理科系を毛嫌いする風潮は由々しき問題であるという認識が背景となっているのであろう。

しかし、理系離れを問題にする前に、いったい理系タイプとか文系タイプとか呼ばれる児童・生徒のタイプの違いはどこからでてくるのであろうか、というのが当モノグラフの初発の問題であった。特に高校生ともなると、理系とか文系というカテゴリーは、何か人種の違いみたいな響きを持って伝わってくるようである。とりわけ、彼らの進路選択には有効な仕切り線のように取り扱われてきたのがこれまでの高校教育の実態である。

高校生にとって文系タイプ・理系タイプへの帰属は、単に受験科目の成績の良し悪しで決められるべきものではなかった。進路選択についていえば、理系タイプの方が、文系タイプよりも比較的に早い段階で自己の進路を確定している。しかも、一貫した進路を維持する傾向が強いことは、彼らをとりまく家庭や学校環境との相互の関係も、自ずと理系的な特質を育むことになろう。

理系タイプは、どちらかといえば勉強一途

に動機づけられた日常生活の中で、規範意識も強く、計画的で効率的な生活設計を旨としている。そして、将来の人生に対しても男女にかかわりなく、確かな強い自信が表明されているようである。理系タイプはまた、社会的な関心事も、理系的なアングルでみようとしており、このような理系的環境の中で自己を成長させている。文系タイプに比べて理系タイプの自己像が極めてシャープに描かれるのは、こうした成育環境の要素の違いにも大きく影響されていよう。

それに比べて、文系タイプには、理系タイプに比べて社交的でありながらもどこかファジーな一面が常につきまとっているようである。暇な時間は、マンガや読書で過ごし、将来の家庭生活や社会へ出てからの出世なども、どうも理系の勢いに負けそうで旗色が悪そうである。

このように、文系・理系の差異を取り出せば、かなりの明瞭な違いとして描けそうである。にもかかわらず、日本の高校における進路分化の特性は、学業成績のウエイトが極めて大きい。理系タイプは確かに学力的にも優れた者が多く、超難関大学を目指して、いうなれば一直線型のコースを進むようなタイプである。しかし、大学入学後に行きづまりや挫折に直面したとき、これまでの社会的経験の幅の狭さゆえ困難をきわめるのではないかと危惧される。一方において、本来生徒自らが体験する部活動やボランティア活動の経験が、そうした進路を分化させるモメントとしてまだ十分に生かされていないようである。さらに、教育学部志望の高校生の中に理系タイプを志向する者が少ないという現状の中で、今後ますます理系的な教育指導体制の充実は政策的にも大きな課題になろう。